

人間関係の綱

関市立板取川中学校 1年 本田 彩登

先月、ぼくの住む岐阜県で、僕と同じ中学生がいじめを動機に自殺するという出来事があった。

今までも、テレビや新聞では度々、いじめが理由で自殺した小中学生の話題を耳にしていたが、「まさかこんな身近な中学生が…」と思うと他人事とは思えない自分がいた。では、いったい何をもっていじめとされているのだろう。妹とこんな話をしたことがある。

「私はお兄ちゃんにいじめられている気がする。人が嫌がる行動をいじめって言って、いじめをすると、される人が苦しい思いをする。」

確かに妹のその言葉に納得したものの、どこか違和感を感じた。

保育園から小学校低学年だった頃。僕は信用できる先生や親族にしか、うまく自分の想いを伝えることができず耐え難い思いを抱えていた。周りから「あいつ、汚ねえよな。」「何言っとるの。訳わからんし。」と言われ、一人になることが多かった。まわりの子たちが言っていることは理解できているのに、その人たちに向かって自分の想いを話そうとすると、何も言葉が出なくなり、教室のすみに隠れたり、教室から飛び出してしまったりすることもあった。人と関わることで自分が傷つくのが嫌で、わざと一人でいたこともあった。そして、いろんなことがどうでもよく感じるようになっていた。でも、死というものも怖くて考えることができなかつた。ただ毎日学校に行き一日が過ぎる。そんな何とも言えない苦しさの中にいた。でも「自分がいじめられているかもしれない」ことを話すこともできなかつた。いじめられていることを認めたくなかつたのかもしれない。いじめられているうちに、自分が悪いから仕方ない。という気持ちに押し寄せられたりもした。妹の発言に感じた違和感とは「苦しい思いをする」だけではなく、苦しいとか、助けてほしい、と言えない苦しみもある。だからこそ、その苦しみから抜け出すことができない。それがいじめだと感じたからだ。自分で解決策を見出し、何とか変えていけるものであれば、苦しみながらも自分で納得する事ができたかもしれない。でも、いじめによって生まれたその感情は、自分が何をしようと逃れることはできないものだった。いじられながら苦笑いし、じわじわと募る心の闇。言い返したくても、言い返せない胸のもやもや。それを誰にも言い出せないつらさ。もしかしたら、その行きつく先は自殺だったのかもしれない。「いじめ」は凶器だ。銃やナイフよりも人を苦しめ

る凶器。ぼくはそう思う。

そんな苦しみの中、僕が死を選ばなかった理由。僕を助けてくれたのは、ある人物だった。その人との関係で、自分がいじられる存在であることをそれほど気にすることがなくなった。

その人は小学生の時のお兄さん。いつも僕にやさしく接してくれた。泣いている時、声をかけてくれたり、僕を笑わせてくれたりしたその人が自分の味方になってくれている気がして、気を強くもつことができた。気を強くもつことで、思い悩むことがなくなったのだ。

このことを通して僕が学んだことは二つ。いじめは、たった一人の人間に核兵器級の苦しみを与えるということ。もう一つは、いつも人は人間関係という綱の上において、いじめという刃物でその綱を切ってしまうと、綱の上の人は、苦しみ、もがき、死んでいくということ。その綱は、人間関係で強くなったり、もろくなったりするということだ。

僕は、この出来事で大きく変わることができた。積極的に人と関わり人間関係の綱をお互い丈夫にできるようにと変わった。いや、今も変わろうと努力している。

いじめは、行為者ではなく、行為を受ける側の気持ちや捉え方を大切に考えなければならない。いじめを少なくするには、一人一人が人の嫌がることをしない事が大事だと学校では言う。「うちの学校は、いじめにゼロだ！」果たして本当にそんなことを言い切れるのだろうか。いじめられていると感じていても、打ち明けられない人もいる。みんなにいじられ、笑うしかない人もいる。数学で明記することのできない、心の闇こそがいじめなのだ。ならばどうすればよいか。人間関係の綱を丈夫にするほかないのだ。いくらからかわれようが、いじられようが、同志がいれば強気になれる。だから僕は、人との関わりを増やす努力をし、人間関係の綱を強くしていきたいと想う。また、僕自身も少しでも多くの人がいじめから救われるよう、できるだけたくさんの人との関わりをもち、その人を助けられたらと思う。今僕は、小学生の時に出会ったあのお兄さんのような人間に近づけているだろうか。そんな想いをもちながら、いじめと向き合っていきたい。